

「聴覚障害児の生理及び病理」

－ 2クラス制での対面実技演習と、聴覚障害学生への配慮ある授業開講 －

立入 哉

1. 授業の基本情報

- ・開講時期：後期
- ・科目区分：学部・特別支援教育専門科目
- ・登録学生数：21名

2. 授業の開講形態について

2021年10月から対面授業、2022年1月以降は遠隔授業となった。

1) 対面授業の実施との聴覚障害学生への工夫

なお、10月からの対面授業では、実習機材の数が少ないため、十分な実習を行うために、クラスAと、クラスBの2クラスに分けて開講した。

対面授業の実施期間中、本講義では、様々な聴力検査を実際に体験し、検査法自体を習得する内容が含まれている。実習が必要な内容は10～12月の対面授業期間に実施し、教科書で学べる内容について後半の遠隔授業で実施することができた。

前半の機材を用いた実習時間については、例えば、聴力検査を行うオーディオメータは1台が140～160万円、脳波聴力検査は1台が300万を超すため、学生がそれぞれ実習する台数を購入できない。このため、21名のクラスを受講生が受講できる時間帯にて、2つに分け、同じ内容を週に2回（月曜1時間目・水曜日・5時間目）実施した。このことで、そもそも大きな教室で（四号館北41教室）で密になりにくい環境であったが、より感染拡大防止のために密にならない授業環境を実現することにもつながった。オーディオメータによる聴力検査実習では、2台のオーディオメータを利用し、被験者役と検査者役を順々に実習する形で実施した。距離が近くな

るため、検査者はマスクとフェースガードを利用して実習を行った。また、接触したボタン・ダイヤル、受話器などは、その都度、消毒を行った。

■聴覚障害学生への配慮

聴覚障害学生は講義者の音声を文字に変換して見ることができる情報保障を受けている。しかし、実習場面では実際にやっていることと、文字の呈示までにタイムラグが生じ、内容伝達に支障が生じる。このため、補聴器利用学生1名、人工内耳利用2名に無線で音声を飛ばすリモートマイクを装着し、かつ、音声だけでは不十分で口話情報（唇の動きを見て何を話しているかを見分ける「読話」）を使うことを考えた。しかし、通常のマスクでは口の動きが隠れてみることができない。そこで、聾学校の教育実習でも使用されていたユニチャーム製の「顔が見えるマスク」を使用して、実習指導を行った。



写真：「顔が見えるマスク」
ユニチャームホームページから引用

表2：アンケート集計結果（回収 12人）

1. 自分は積極的に取り組みましたか？

強くそう感じる 7人

そう感じる 5人

※どちらでもない以下は0人

2. 内容は理解しやすかったですか？

強くそう感じる 5人

そう感じる 3人

どちらでもない 4人

※そう感じない以下は0人

3. 内容に関心を持つことはできましたか？

強くそう感じる 5人

そう感じる 7人

※どちらでもない以下は0人

4. 教材・機材の使い方は適切でしたか？

強くそう感じる 6人

そう感じる 6人

※どちらでもない以下は0人

5. 授業では重要な箇所を強調できていましたか？

強くそう感じる 8人

そう感じる 4人

※どちらでもない以下は0人

6. 授業方法に工夫が見られましたか？

強くそう感じる 9人

そう感じる 3人

※どちらでもない以下は0人

7. 科目への興味が湧きましたか？

強くそう感じる 6人

そう感じる 6人

※どちらでもない以下は0人

8. 総合評価

受講が役立つと強く感じる 11人

受講が役立つと感じる 1人

※どちらでもない以下は0人

■自由意見

- ・クラスを分けたことで短い時間でも自分も機械に触れる機会を持てたことが良かった。
- ・実習機材に触れることができ、実際に数値を出すことができたので、このようにやるのだと現実的に学べたことが良かった。
- ・測定機器の操作や結果の見方の勉強は難しかったけど、小テストをやることで見直すことができ確認できてよかったです。
- ・特支の授業の中で一番勉強しました。
- ・先生のわかった欲しいと言う気持ちが良く伝わってきました。